

マルコによる福音書 4章 21節～29節

2015年5月28日

古本 靖久

1、聖歌 212番 「天と地と海 生きものすべて」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 67 ページ）

4、テキストの位置

4章から始まった種のたとえは、「ともし火」、「はかり」、「種の成長」と続いていきます。これら一つ一つのたとえは、どのように伝えられてきたのでしょうか。

実はこれらのたとえは、イエス様が同じ時に言われたのではなく、マルコ福音書の著者が「たとえ集」としてこの場所にまとめたのではないかとされています。

ガリラヤ宣教②	4:1-2	たとえで語る
	4:3-9	種と土地のたとえ
	4:10-12	たとえによって隠されるもの
	4:13-20	種と土地のたとえの解釈
	4:21-23	ともし火はあらわにされる
	4:24-25	量られるわたしたち
	4:26-29	種の成長と神の国
	4:30-32	からし種と神の国
4:33-34	イエスはたとえで語る	

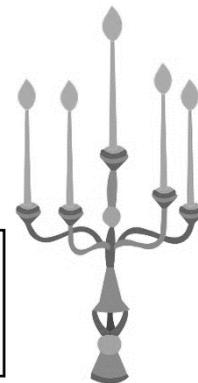
その目的として、イエス様のたとえ話を記憶しやすいようにひとまとめにしたか、あるいはマルコ福音書の著者がある問題意識をもったためか、と推測されます。

ではなぜ別々の話がまとめられていると考えられるのでしょうか。それはマタイ福音書とルカ福音書に記された同じ記事が、バラバラのところに置かれているからです。

右の表のように、今日の箇所は元来違う伝承だった可能性が高いです。それではマルコ福音書はどのような意図をもって、

マルコ	マタイ		ルカ	
4:21	5:15	地の塩、世の光	11:33	体のともし火は目
4:22	10:26	恐るべき者	12:2	偽善に気をつけさせる
4:24	7:2	人を裁くな	6:38	人を裁くな
4:25	25:29	タントンのたとえ	19:26	ムナのたとえ

て、これらの伝承を一つにまとめたのでしょうか。節ごとに見ていきましょう。



5、節ごとに

◆ともし火はあらわにされる

4:21 また、イエス（彼）は（彼らに）言われた。「ともし火を持って来るのは、
升の下や寝台の下に置←（かれる）ため（にやってくるの）だろうか。
燭台の上に置←（かれる）ためではないか。

まず、新共同訳聖書で「ともし火を持って来る」と訳されているところですが、マタイやルカ福音書では、「ともし火をともして…置く」となっています。また原文を読んでもみすと、目的語のように訳されている「ともし火」は、主語であることに気づかされます。

「ともし火がやって来る」、一見不思議な文章にも見えますが、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（ヨハネ福音書 1 章 4～5 節）とイエス様は光として描かれることもあります。

だとすると、ともし火とはイエス様を指すのでしょうか。それともイエス様が伝えようとした神の国でしょうか。いずれにせよ、それらは隠されるために来たものではありません。マルコ福音書には弟子批判が顕著に見られますが、弟子たちの閉鎖的な考え方によって、イエス様の福音がすべての人に知らされていないことを、このように言ったのかも知れません。

ちなみに升はともし火を消すために上からかぶせる道具で、煙が出ないようにこういうものを用いていたそうです。また寝台の下に置くということは、明かりが部屋全体にいきわたらないことを指します。火事になりそうな気もしますが。

4:22 隠れているもので、あらわになら（現れるため）でないものはなく、秘められたもので、公になら（明るみにもたらされるため）でないものはない。

最初に申し上げたように、マルコは元々別の伝承であった 21 節と 22 節をつなぎ合わせました。ここでも真理を隠そうとする人々への批判があるように思います。

イエス様が語る真理は、一部の人にだけ伝えられているのでしょうか。そうではありません。今は隠れていたとしても、必ず現れるのです。イエス様の教えは、隠されるものでも秘められたものでもありませんし、隠そうとしても無駄なのです。

教会は何をすべきところなのかということ、ここで問われているように思います。教会は秘密を守り、自分たちだけが幸せになろうとするところではないのです。光であるイエス様の福音を伝える、宣教の場所であるべきなのです。

4:23 (もしも) 聞く耳のある(を持つ)者は(がいれば)聞きなさい。」

この言葉は「種と土地のたとえ」の最後(4章9節)にも出てきました。マルコ福音書では「聞く」ということに重点を置きます。

21~22節、そして23~24節をまとめ、その中心にこの23節を置いたマルコは、イエス様のたとえをしっかりと聞くようにと、わたしたちを促すのです。

◆量られるわたしたち

4:24 また、(彼は)彼らに言われた。「(あなたがたが)何を聞いているかに注意しなさい。あなたがた(が量るその秤でああなたがたも量られるだろう。)は自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。(あなたがたにはさらに付け加えられるだろう。)

そしてさらにイエス様は、聞く事柄に注意を向けるように言われます。この箇所はマタイやルカでは「人を裁くな」という山上(平地)の説教の一節に出てきます。

「量る」という語には「裁く」や「批判する」という意味もあり、人を量る、つまり人を裁くなら同じようにあなたも裁かれるよ、ということをイエス様は言われているのです。

新共同訳聖書では「更にたくさん与えられる」と、何だか恵みが増えていくように訳されていますが、原文通りだと、「さらに付け加えられる」となっています。先ほどの「人を裁く」という文脈から考えると、「あなたたちはもっと厳しい尺度で裁かれるよ」となるのです。



わたしたちは人の行動や信仰の持ち方を、知らず知らずのうちに「裁く」ことがあるかもしれませぬ。でもその前に、自分自身がどうなのかを振り返ることも必要なのでしょう。

4:25 持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げ(去)られることになる。」

この言葉はタラントン(ムナ)のたとえの中に出てきます。多くを預かった人がそれを倍にして主人にほめられますが、預かったものを隠しておいた人は叱られるというたとえでした。

わたしたちが聞く福音は、注意して聞けば聞くほど多く与えられます。どのように聞くか、それが大事なのです。

◆種の成長と神の国

4:26 また、イエス（彼）は言われた。「神の国は次のようなものである。人が土（地）に種を蒔いて、

イエス様はたとえを語られます。イエス様のたとえを見ますと、生活に密着したものが本当に多いことに気づかされます。種、麦、からし種、パン種などの植物や羊など、また人間関係や労働行為の中からも、たとえを語られるのです。

イエス様はわたしたちと同じように生活され、わたしたちと同じように楽しみ、苦しみ、喜び、涙を流されました。だからわたしたち一人一人の思いを理解してくださるのです。わたしたちと同じ場所に立ってくださるのです。

「神の国は次のようなものである」、イエス様は語られます。1章15節に出て来た時にも説明しましたが、神の国とは現代の国のように、特定の領域を指すものではありません。「神の支配」という意味を持つ言葉です。

「神さまが支配する」というと、少し抵抗を感じられる方もおられるかも知れません。「支配」という言葉に、マイナスイメージを強く持つ方もおられるでしょう。しかしここでいう「支配」は、親鳥が雛を包み込むように、そのみ手で守るというように感じていただくとよいかも知れません。

さて、イエス様は言われます。「人が種を地に蒔いた」と。4章3～9節の「種と土地のたとえ」と非常によく似ています。

4:27 （そして）夜昼、寝（たり）起き（たり）しているうちに（と）、（その人が知らないうちに）種は芽を出して成長するが、~~どうしてそうなるのか、その人は知らない。~~

しかし、種を蒔く人は、その後何も行動を起こしません。彼は「種を蒔く」という行為を一度したきりで、あとは「寝る」と「起きる」を繰り返すだけです。水をやるとも肥料をあげるとも、何も書かれていません。

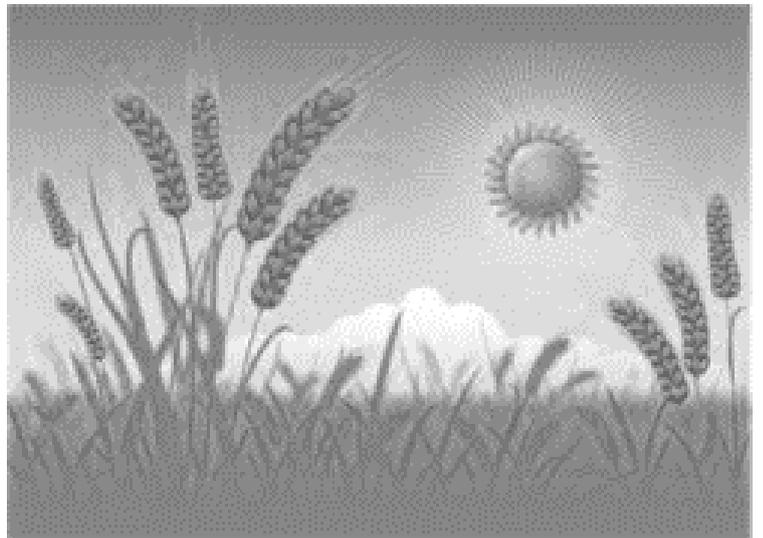
この人は種を蒔いたあと、ほったらかしにしたのでしょうか。あとは何もしないでいい、あなたには関係のないことなのだから、と伝えたいのでしょうか。そうではありません。

彼は種を蒔きました。それが彼の仕事でした。そして彼は任せたのです。委ねたのです。種を成長させてくれる神さまにすべてを。あなたたちは安心してわたしに委ねなさい、このイエス様の呼びかけは、わたしたちにも励ましとして聞こえるのではないのでしょうか。

4:28 主（大地）はひとりでに（おのずから）実を結ばせる（ぶ）のであり、まず茎（芽）、次に穂、そしてその穂には（の中に）豊かな実ができる（満ちる）。

大地がその力によって実を結ぶ。そこには成長の過程があります。芽が出て、穂がつき、そして穂の中が実で満ちていくのです。

イエス様は、その様子を神の国だとたとえられます。種が一生懸命努力して、実が結ばれるわけではありません。また、種を蒔いた人が何かをして、実が実ったわけでもありません。大地がおのずから実を結んだのです。



種は成長していきます。大地によって、知らない間にぐんぐん成長していくのです。イエス様は弟子たちと一緒に道を歩いていて、ついこの間種蒔きをしていたはずの土地に、いつの間にか大きく育っていた麦を見て、「これこそ神の国の出来事だ」と思われたのでしょうか。

「時は満ち、神の国は近づいた」、イエス様は言われます。イエス様が蒔かれた種は、わずかだったのかもしれませんが。またイエス様から種を蒔くようにと言われたわたしたちも、何度も失敗しながら種を蒔き続けます。そして神さまは、どのような場合でも豊かな実を結ばせてくださるのです。

4:29 実が熟す（許す）と、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

旧約聖書ヨエル書の中に、このような記述があります。「鎌を入れよ、刈り入れの時は熟した。来て踏みつぶせ、酒ぶねは満ち、搾り場は溢れている。彼らの悪は大きい。」（ヨエル書 4 章 13 節）

このように「収穫」や「刈り入れ」は聖書の中で、終末時の最後の審判の象徴として描かれることがあります。このことから、この箇所を不意に訪れるであろう審判に対する警告ととらえることもできます。

しかし、この箇所で強調されているのは、神さまが種を成長させるということだと思いません。豊かな収穫が必ず訪れる、それが神の国なのだということがメッセージなのです。収穫とは、わたしたちに与えられた希望なのです。

<今日の箇所から>

イエス様はわたしたちの元に来られました。自分だけのためではなく、教会の人たちだけのためでもなく、親しい人たちのためだけでもありません。すべての人のために、イエス様は来られました。

わたしたちは神さまから与えられた大きな愛を、升の下に隠していないでしょうか。布団をかぶせて、自分だけのものにしてはいないでしょうか。イエス様は言われます。「そんなことをしても無駄だよ。すべてはみんなの目に触れるから」。

わたしたちはまた人の行動に目を光らせ、その人の信仰についてとやかく言うこともあるかもしれません。そのようなわたしたちにもイエス様は言われるのです。「そんなことは気にしなくてもいい。あなたには十分与えているし、これからも与えるから」。

それらの言葉を「聞く」ということが、わたしたちには求められています。聖書を通して、日々の生活の中で、神さまは語りかけてくださいます。またイエス様は、その歩みを示し、わたしのあとに従うようにと告げられます。わたしたちはその言葉を「聞く」のです。

そしてわたしたちは、イエス様と共に福音の種を蒔くようにと促されます。とても大変なことです。何をやったらよいのか、わからないことだらけです。しかしイエス様は言われるのです。

「なに、大丈夫。あとは神さまに、すべて委ねなさい。かならず神の国はやってくることになっているんだから」。

今回の学びはこれで終わります。次回は6月25日(木)10時30分からです。「からし種のとえ」、「たとえを用いて語る」、「突風を静める(マルコ4:30~41)」について学んでいきます。